

メキシコにおけるカトリシズム、聖ヤコブ、聖地巡礼

井上 幸孝（専修大学文学部教授）

Catholicism, Saint James and Pilgrimage in Mexico Yukitaka Inoue School of Letters, Senshu University

This article first presents briefly the Christianization process of Mexico, and then studies two particular themes related to Catholicism in historical perspectives: the apostle Saint James (*Santiago*) and the pilgrimage in Mexico.

Catholicism arrived in Mexico after the conquest of the Aztec Empire in 1521. The mendicant orders played an important role in the early stages of Spanish domination. The politics of congregations was also important for the Christianization of indigenous population. The patron saints have left an important mark and until today their festivals remain the most important event in indigenous towns and villages.

The cult of Saint James, formed in the medieval Iberian Peninsula, was brought to Mexico with the Spanish domination. However, it should be noted that his miraculous appearance, related in chronicles, was not the only way of its diffusion in Mexico. In fact, his representations that we can observe actually are mainly the "Moor Slayer" (*matamoros*) and not the "Indian Slayer" (*mataíndios*). So, the processes of congregation and other aspects of Christianization of indigenous peoples in colonial times should be considered in order to know more about its filtration in colonial Mexico.

On the other hand, the pilgrimage to Santiago de Compostela (Galicia) did not become common in Mexico for geographical reasons. However, it can be pointed out that many sacred Christian places arose in the colonial era. A fine example is Tepeyac, where the Virgin of Guadalupe is worshiped. Another example would be Chalma, where a crucified image of Jesus Christ is said to have appeared miraculously in a cave. These places had been sacred in the pre-Columbian period, and it can be said that both Indians and Spaniards were actors of such "substitution" of the ancient Mesoamerican cult into the Catholic.

In this way, Catholicism in Mexico historically has been the result of what had been brought from the Iberian Peninsula, but in many cases with its own modifications in Mexico.

はじめに

本稿では、メキシコにカトリック信仰が導入された歴史的経緯を概観した上で、同地における聖ヤコブ（スペイン語ではサンティアゴ *Santiago*）信仰とカトリック巡礼について具体的な事例を見ることにしたい。メキシコの聖ヤコブ信仰や聖地巡礼の一端を明らかにすると同時に、かつての宗主国スペインからもたらされたキリスト教の諸要素が取舍選択されたり、地元の事情に沿った歴史的な変容を伴ったりしていることを示すことが本稿の目的である。

1. メキシコにおけるカトリシズム

メキシコは、アステカ・マヤ・テオティワカンなどに代表されるメソアメリカ文明が前2000年頃から発祥し、西欧と接触するまで高度な文明を独自に発展させた長い歴史を持つ¹。メキシコにキリスト教がもたらされたのは、16世紀にスペインの侵略を受けて以降のことである。メキシコおよびその周辺地域の征服は、コルテスによるアステカ王国征服（1519~21年）に始まり、その後、アルバラードらによる中米の征服（1523~36年）、モンテホー族によるユカタン半島の征服（1527~46年）などが続いた。1535年にはヌエバ・エスパーニャ副王領が設置され、カリブ海の島々やフィリピン諸島（1574年以降）を含む広大な地域が副王都メキシコ市の管轄下に置かれたが、さらなる遠隔地——例えば現在のアメリカ合衆国カリフォルニア州——では、

上記の征服から200年以上後にようやくスペイン支配が本格化した場所もあった。これら地域は、19世紀前半以降に独立することになったが、スペインによる征服・植民地支配の間にカトリシズムが強制され、定着した。

16世紀当時のスペイン²にとって、新大陸の征服には聖俗両方の動機があった。武力による征服と「魂の征服」³は表裏一体であり、異教徒であるインディオのキリスト教化は支配体制の確立と不可分であった。それゆえ、遠征隊には従軍司祭が同行するのが一般的であったし、征服がなされた後は、各修道会（フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティヌス会などのほか、後にはイエズス会）が組織だった伝道を行った。例えば、コルテス一行には、メルセス会士オルメドが従軍しており、征服の過程で同盟者となったトラスカラ先住民に洗礼を与えたり、アステカ王にキリスト教への改宗を勧めるなどした。1521年8月のテノチティトラン陥落からおよそ1年半後の1523年1月には、早くもフランシスコ会がガンテラ3名を上陸させ、さらに翌24年にはバレンシアを団長とするフランシスコ会の「十二使徒」が派遣され、組織的なキリスト教化に着手した。修道士たちは学院を創設して先住民貴族の子息の教育も進め、フランシスコ会がトラテロルコに設置したサンタ・クルス学院では、母語のナワトル語に加えてスペイン語とラテン語を操るエリートたちを多く輩出した。

16世紀半ばに始まり、17世紀初頭に大規模に実施されたコングレガシオン集住化政策では、先住民を町や村に集住させ、スペイン風の街区を整備した⁴。その目的は統治や徴税の利便性だけではなく、キリスト教の布教も視野に入れられていた。それゆえ、この政策の実施と前後して町村の中心にはカトリック教会が置かれた。規模の大きな町の場合、修道院を併設した教会が置かれ、小規模な村や集落にも定期的に修道士が訪れるようになった。このような町村の教会では守護聖人が定められた。現在もメキシコ各地で見られるように、「聖人名+現地語の地名」という村落名が定まっていたのも、この植民地時代初期に見られた現象である⁵。

この際、どの守護聖人がどういう経緯で選択されたのかについては十分な研究がなく詳細は不明であるが、一定の傾向があったと思われる。例えば、筆者が研究対象としているメキシコ盆地とその周辺では、聖ミカエル（サン・ミゲル）という地名が比較的多く見られる。他によく目にする地名としては、聖母マリア（サンタ・マリア、コンセプシオンなど）、聖ペテロ（サン・ペドロ）、聖ヤコブ（サンティアゴ）がある。

征服から500年の時が経過する中で、先住民の町村ではカトリック聖人の祭礼が重要な役割を占めるようになっていった。現在、守護聖人の祭礼は多くの町村において年間最大のイベントの一つである。一般的に、守護聖人の祭礼は、マヨルドミア⁷と呼ばれる祭礼実施の団体を中心にして盛大に行われる。その内容は個々の町村や地区によって異なるが、共通の特徴として、教会や聖人を飾り立て、多くの人々が集う祭礼を行うことが挙げられる（写真1, 2, 3）。さらに、祭礼期間中にはミサなどの儀式だけでなく、様々な出し物が用意され、移動遊園地、ハリペオ、舞踊などや、大掛かりな仕掛け花火が準備されることもある。また、祭礼を実行する組織であるマヨルドミアは、近隣などの関係の深い村や地区の代表者を招待し、相互の交流と親睦を図る。

現在のメキシコのカトリック信者は人口の8割程度とされる。とりわけここ数十年の間に農村部でのプロ



写真1: 祭礼期間中の聖バルトロマイ像
〔2010年、メキシコ市アルパロ・オブregon区
サン・バルトロ・アマヤルコで筆者撮影〕



写真2: 祭礼の一環で聖ヒエロニムス
像と旗を掲げて地区内を巡る人々
〔2012年、メキシコ市ラ・マグダレナ・コ
ントララス区サン・ヘロニモ・リディ
で筆者撮影〕



写真3: 聖ラウレン
ティウスの祭礼のプ
ログラム
〔2015年、メキシコ市ク
アヒマルパ・デ・モレロ
ス区サン・ロレンソ・ア
コピルコで筆者撮影〕

テスタント諸派の浸透や都市部の若年層の教会離れが起きているのも事実であるが、圧倒的多数がカトリック信者であり、上記のような祭礼に参加する人々は現在も多い。

2. メキシコにおける聖ヤコブ

聖パウロや大天使ミカエル、聖母マリアなどだけでなく、聖ヤコブが守護聖人になっている町村がメキシコに多く見られるのは、旧スペイン領特有の現象と言えるだろう。イエスの使徒大ヤコブがスペインにおいて広く信仰されるようになったのは、メキシコ征服よりも何世紀も前のことである。中世スペインでは、9世紀初頭に聖ヤコブの遺骸が「発見」され、異教的要素やシンボルが組み込まれながら、その神話化が進んだ。聖地サンティアゴ・デ・コンポステラ（以下、コンポステラ）を目指す巡礼は、10世紀半ばにはイベリア半島各地のみならず、ピレネー以北に広がっていき、11世紀末から13世紀にはフランスやドイツなどヨーロッパ各地からも巡礼者が詣でる聖地となった⁸。

とはいえ、新大陸征服が進んだ16世紀には巡礼が下火になった。その背景には、プロテスタントの興隆によって聖人崇敬や巡礼が禁止されたことや、民衆信仰の重心が聖母マリアへ移動したことなどがあったとされる⁹。前者は確かに聖ヤコブ信仰を減速させたであろう。しかし、後者については、アメリカ征服に関連する史料の記述に見られるように、聖母マリアのみならず聖ヤコブもしばしばスペイン人を助ける奇跡を起こすと見なされた¹⁰。その一方、アメリカ大陸の征服・植民地化と時を同じくして、スペインでは聖女テレサ・デ・アビラを国の守護聖人にしようとする動きがあったが、これに反対する聖ヤコブ推進派の抵抗も強かった¹¹。これらを総合的に考えれば、中世の全盛期ほどではないにせよ、16世紀のアメリカ征服が進んだ時代においても、新天地へと乗り出したスペイン人の間で聖ヤコブ信仰はある程度根強いものだったと思われる。

かくして聖ヤコブ信仰はメキシコを含むアメリカ大陸にもたらされた。聖ヤコブがメキシコやその他の各地域に定着した経緯について、歴史研究で明らかにされていない部分は多い。とはいえ、現時点では、聖ヤコブ信仰がメキシコに導入され普及していった過程は決して単純なものではなく、複数の経路を想定する必要があるという点を指摘することができる。その例として、ここでは征服者たちにとっての聖ヤコブと先住民村落における聖ヤコブについて簡潔に見ることにしたい。

コルテスのアステカ征服をはじめ、スペインによるアメリカ大陸の征服・植民地化において聖ヤコブが奇跡的に出現したとする記録が多く残されている¹²。出現譚は複数の場所について記録されているが、最初の出現場所は1519年、ベラクルス上陸前のメキシコ湾岸タバスコ地方での先住民との戦闘（セントラもしくはシントラの戦い）とされる。しかしながら、コルテス自身や征服に携わった人々の記録文書を検証すると、明確な「奇跡」の同時代証言はほとんどなく、アステカ征服のおよそ30年後に出版されたロペス・デ・ゴマラの書物¹³によってこの出現譚が広く流布したものと考えられる。それと同時に、聖ヤコブの名を叫びながら戦闘を行うなど、征服者たちの間に「白馬に乗って戦いを助けてくれる聖ヤコブ」¹⁴のイメージが根づいていたことも記録文書から窺い知ることができる。つまるところ、敵（中世ではモーロ人＝イスラーム教徒、新大陸では先住民＝インディオ）を倒すのに力を貸してくれる聖人という信仰は、スペイン人征服者の間に一定程度根づいていたと言える。スペインの領土拡大のそれぞれの時点で、前線の要所にサンティアゴという名の町が置かれたのも、そうした信仰が反映されたものと考え得る¹⁵。

アステカ征服やそれに続く諸地域の征服戦争における聖ヤコブ出現の奇跡という話は、16世紀半ば以降、歴史書や記録文書において、頻繁に繰り返されるようになった。すなわち、個々の出現に関する証言の正確さや信憑性はさておき、「聖ヤコブが出現して征服を助けた」という話が繰り返し書物に記されることにより、アステカ征服の半世紀から1世紀ほど後の征服者の子孫や入植者たちにとって、聖人の顕現は「既成事実」として定着していったものと考えられる¹⁶。

ところで、「征服者」には時として先住民も含まれた。メキシコ市から約200km北西に位置するサンティアゴ・デ・ケレタロ市の創設は、複数の史料があって正確な歴史的経緯がはっきりせず、創設に関わる記録は主に二種が存在する。一方は、オトミー系先住民のエルナンド・デ・タピア（先住民語名コンニ）を創設者とする史料で、もう一方は同じくオトミー系で「トゥーラおよびヒロテペクの王家の子孫」ニコラス・デ・サン・ルイス・モンタニェスの功績に与する記録である。後者の記録には、「1522年7月25日の聖ヤコブの日に」、「神が聖ヤコブを介して太陽の動きを止めるという奇跡」を起こした旨が記されている¹⁷。この史料の

記述は後世に作成され、17世紀にフランシスコ会士を介して流布したものであったが、17世紀半ばに定められたケレタロ市の紋章にはこの奇跡譚に登場する太陽と聖ヤコブが含まれた¹⁸。このように、ケレタロ創設にまつわる聖ヤコブ出現譚とその流布には、征服者だった先住民の子孫とスペイン人修道士たちの双方が関与した可能性が考えられる。

しかしながら、聖ヤコブ出現譚だけを見ても、各地の先住民村落において聖ヤコブ信仰が広く定着したこととの因果関係は明確に認められない。植民地時代から現代にいたるまで、数多くの先住民村落にサンティアゴの地名や守護聖人としての聖ヤコブ信仰が認められる。メキシコ国内に現存するサンティアゴの地名は526あり、歴史上存在が確認されるものも含めると715か所に上るとされる¹⁹。こうした場所にかんして聖ヤコブが浸透し定着したのかについては、別の歴史的経緯を考えなければならない。これに関して筆者が重要と考えているのは、先述の^{コングレガシオン}集住化政策による先住民村落の再編、そしてそれら村落における修道士らによる布教活動の実態である。

集住化政策は、1545年の王令を契機として、メキシコでは第2代副王ベラスコ（1550～64年）の治世に始まる。だが、実際には北方の植民地化に手こずるなどしたため、集住化はさほど進まず、結局、大規模に実施されたのは第8代副王ベラスコ2世（1590～95年）以降、17世紀初頭にかけてであった。上述の通り、集住化は先住民町村の再編を意図した政策で、聖俗両方の効果が期待された。この時期に多くの村や地区で守護聖人が定められたと思われるが、ドミニコ会が主に布教したオアハカ地方や、メキシコ盆地から北側にかけてアウグスティヌス会が布教した地域（現メキシコ州からイダルゴ州にまたがる地域）のように、聖ヤコブが守護聖人に選ばれることが多かった地域にいくぶん偏りが認められる。史料の制約があり、具体的経緯はほとんどわかっていないものの、おそらくは修道会によって聖ヤコブをより積極的に守護聖人として村落要人に勧めたケースがあったものと考えられる。

いずれにせよ、現代のメキシコの町村で見られる聖ヤコブ表象には明白な傾向がある。一般に、聖ヤコブの姿は、①使徒聖ヤコブ、②巡礼者聖ヤコブ、③騎士としての聖ヤコブがあり、③については、白馬に跨った「モーロ人殺しの聖ヤコブ（サンティアゴ・マタモロス）」が一般的であるが、歴史的にはそのヴァリエー



写真4:使徒聖ヤコブ
〔2019年、スペイン、レオン大聖堂で筆者撮影〕



写真5:巡礼者聖ヤコブ
〔2019年、スペイン、サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂で筆者撮影〕



写真6:モーロ人殺しの聖ヤコブ
〔2018年、スペイン、マドリッド、サンティアゴ教会で筆者撮影〕



写真7:19世紀ペルー絵画の「インディオ殺しの聖ヤコブ」
〔2019年、スペイン、サンティアゴ・デ・コンポステラ、巡礼博物館で筆者撮影〕



写真 8: 聖ヤコブ像 (18世紀後半)
〔2019年、メキシコ州テポツォトラン、
副王領期博物館で筆者撮影〕



写真 9: 聖ヤコブ像 (年代不明)
〔2018年、メキシコ州ティアンギステン
コ行政区サンティアゴ・デ・ティラパ
で筆者撮影〕



写真10: 聖ヤコブ像 (20世紀?)
〔2012年、メキシコ市トラワク区
サンティアゴ・サポティラン
で筆者撮影〕

ションが存在する²⁰。特にアメリカ大陸に関しては、殺戮対象がイスラーム教徒ではなく、アメリカ先住民である「インディオ殺しの聖ヤコブ (サンティアゴ・マタインディオス)」があった (写真 4, 5, 6, 7)。現代メキシコに広く見られるのは、「モーロ人殺しの聖ヤコブ」である (写真 8, 9, 10)。植民地時代に建てられた各地の教会で筆者がこれまでに目にしたところでは、使徒や巡礼者姿の聖ヤコブ表象も一部には認められるが、圧倒的に少数である。このように、スペインで頻繁に目にする巡礼者聖ヤコブは、植民地時代メキシコではあまりポピュラーではなかった——少なくとも騎士姿よりはるかに少なかった——ことが指摘できる。

では、「モーロ人殺しの聖ヤコブ」イメージがなぜメキシコ先住民の間に定着したのだろうか。その理由は、実際の布教の場面で「インディオ殺し」ではなく「モーロ人殺し」のイメージが伝えられたからに他ならない。そもそも布教対象である先住民自身を踏みつけ、殲滅させる聖ヤコブ像を修道士らが提示したところで、それを受け入れる先住民は皆無だったであろう。16世紀後半にフランシスコ会士サアグンがナワトル語で著した『キリスト教聖歌集』の聖ヤコブの描写はそのことを如実に反映している。この史料によると、聖ヤコブは「モーロ人やトルコ人」を恐れさせる「偉大な戦士で我々の指揮官」であり、「ここヌエバ・エスパニーヤへ我々の敵である悪魔^{トルカテコロ}と戦いにやって来られた」のであった²¹。

さらに、先住民村落における宗教劇や踊りの導入も「モーロ人殺しの聖ヤコブ」イメージの定着に重要な役割を担ったと考えられる。宗教劇の導入については研究の蓄積があるものの、これまで筆者が調べた限りにおいては、聖ヤコブへの直接の言及は必ずしも多いわけではない²²。とはいえ、「モーロ人とキリスト教徒の踊り」については、現代を扱う文化人類学者の研究が比較的多く、現代メキシコでも盛んに演じられていることがわかっている²³。その起源は1150年にスペインで行われたバルセロナ伯ラモン・バランゲー 4 世の結婚式で披露されたものとされ、イスラーム教徒と戦うキリスト教徒をモチーフとする踊りとその祝祭は現代スペインの農村部にも残されているが、現在のメキシコにも広く見られる。筆者自身もこの系統に属する踊りの上演やその練習風景をここ数年の現地調査で複数回目撃している。

以上のように、植民地時代に先住民村落に広まった聖ヤコブ信仰は、主に「モーロ人殺しの聖ヤコブ」像に関わるものであった。その歴史的経緯については、具体的なカトリック布教の現場に関する個別事例の研究が必要な段階にあり、ここで触れたもの以外にも布教の諸側面を丁寧に検証していく必要があると言えるだろう。

ところで、キリスト教化に伴う聖ヤコブ信仰の普及に関連して、スペインのコンポステラへの巡礼がメキシコ先住民の間に根づかなかったことも指摘しておく必要がある。この点に関する先行研究もほぼ皆無であるため詳細は不明だが、スペイン側の事情と現地側の事情の双方がその背景にあったものと思われる。スペイン側の事情としては、中世後期に隆盛を誇ったコンポステラ巡礼そのものが停滞期を迎えていた。メキシコ側の事情としては、物理的な距離の問題があった。スペイン帝国の一部だったとはいえ、そもそも大西

洋を渡ったインディオは極めて例外的であったし、入植者のスペイン人がコンポステラへの巡礼のためにわざわざ本国に戻るといふことすら容易ではなかった。

3. メキシコ国内における巡礼

征服後のメキシコにおいてコンポステラ巡礼は根づかなかつたものの、キリスト教の巡礼そのものが植民地時代メキシコに不在であったのかという点、決してそうではない。スペイン人が聖地巡礼という概念をもたらすまでもなく、メソアメリカ文明にはもともと宗教的な巡礼という行為が存在した。つまり、スペイン支配下のメキシコでは、征服前の宗教における聖地がそのままカトリックの巡礼地になるという現象が進んだ。

先スペイン期の神殿ピラミッドがあった場所に、征服後にカトリック教会が建てられたケースは頻繁に見られる。メソアメリカの神殿が主に東向き（西側からアクセスする向き）であったことも布教者たちにとって好都合だったのであろう。また、メソアメリカ先住民は「どちらの神の方が強い」という尺度で神々の優劣を判断したため、元々崇拜されていた「異教の神」の神殿があった場所に、新たな神（キリスト教の唯一神）の教会を建造するといふことは、キリスト教化の推進に大きな効果があった。

先スペイン期の巡礼地がキリスト教の巡礼地に変容した最も有名な例は、グアダルーペの聖母マリア教会（Basílica de Santa María de Guadalupe）である。グアダルーペの聖母（写真11）は、1531年、先住民の聖ファン・ディエゴの前に奇跡的に出現したとされる聖母マリアだが、当時メキシコ市の郊外（現在はメキシコ市内グスタボ・A・マデロ区）に位置したテペヤクの丘には、かつてトナンツィン（ナワトル語で「我々の母上」の意）という女神が祀られていた。16世紀後半には多くの先住民がここに詣でるようになっており、フランシスコ会士サアグンはこの聖母教会への巡礼が異教崇拜を偽装したものであるとして次のように批判している。

山間部でも、厳かに生贄が行われ、遠路はるばる人々が巡礼に訪れた所が三ないし四か所ある。その一つは、ここメキシコにあるテペアカクという丘で（…中略…）、今では聖母グアダルーペと呼ばれている。この場所にはかつて、神々の母であるトナンツィン、つまり「我らが母」に献納された神殿があった。そこではこの女神を称えて多くの生贄が捧げられた。メキシコからも、二〇レグワ〔一レグワは約五・五キロ〕以上も離れた各地からでも、生贄のために人が集まり、数々の供え物を携えてきた。老若男女がこの祭礼に集まったのである。（…中略…）今ではそこに聖母グアダルーペ教会が建てられているが、説教師たちが神の母、聖母をトナンツィンと呼ぶのをいいことに、彼らはその教会もトナンツィンと呼んでいる。（…中略…）はっきり分かっているのは、最初にこの名が付けられた時から、昔のトナンツィンを意味していたことである。これは改めねばならないであろう。神の母、聖母マリアは正しくはトナンツィンではなく、ディオス・イナンツィンとなるからである。これは悪魔が発明したもので、トナンツィンという誤った名の下に偶像崇拜を隠そうとしているように思われる。昔と変わらず今でも、遠く離れたところからこのトナンツィンのもとへ巡礼に来るのであるが、この信仰もまた疑わしい。といふのは、聖母〔を号とする〕教会はいたるところにあるにもかかわらず、そこには参拝せず、以前同様、遠方からもこのトナンツィン教会へやって来るからである²⁴。

サアグンはこれ以外にも、チアウテンパン（現トラスカラ州）の聖アンナ、ティアンギスマナルコ（現プエブラ州）の聖ヨハネの巡礼が同様の「偽装」であると非難しており、先住民が征服以前と同様に巡礼を行っていたことが確認できる。

17世紀中葉以降、グアダルーペの聖母信仰はクリオーリョ（現地生まれのスペイン人）層にも浸透し、1810年、聖職者ミゲル・イダルゴがメキシコの独立を目指して蜂起の第一声を上げた際に掲げられたのは「我らがグアダルーペの聖母万歳」と記された聖母の旗であった。現在に至るまで、グアダルーペの聖母は国民的さらには国際的信仰を集めており、12月12日のグアダルーペの聖母の日の参拝者数は、2018年には1060万人を記録した²⁵。

このように大規模ではないものの、植民地時代から現代までカトリックの巡礼地となっている場所はメキシコ国内にいくつも存在する²⁶。例えば、メキシコ州のチャルマは、メキシコ市から約100kmの「好立地」の巡



写真11: グアダルーベの聖母 (18世紀前半、ファン・ビジェガス画)。
〔2012年、スペイン、マドリード、アメリカ博物館で筆者撮影〕



写真12: チャルマのキリスト礼拝堂
〔2015年、メキシコ州マリナルコ行政区チャルマで筆者撮影〕



写真13: チャルマで「モーロ人とキリスト教徒の踊り」の一種を奉納するトラスカラ州からの巡礼者たち
〔2015年、メキシコ州マリナルコ行政区チャルマで筆者撮影〕

礼地である²⁷。人口1800人余りの村であるが、30件ほどの宿泊施設がある²⁸。神秘的な自然環境の山あい位置するチャルマのキリスト礼拝堂 (Santuario del Señor de Chalma) には、とりわけ近隣州の先住民村落から集団でやって来る巡礼者が多い (写真12, 13)。

このチャルマも征服前からの巡礼地であったと考えられる。信仰の対象となっている十字架のキリスト像は、アウグスティヌス会がこの地域の布教を開始したわずか2年後の1539年に奇跡的に出現したとされる。洞窟内にオストテオトル (ナワトル語で「洞窟の神」) が祀られ生贄が行われていたが、ある時、異教の祭壇はばらばらに破壊され、代わりにキリスト像があったという。実際にこの話が史料に残されるのは17世紀末以降で、巡礼地として確立されたのも18世紀以降であったと考えられるが、チャルマのキリスト信仰は、修道士らが積極的に関与し、結果的に既存の信仰がキリスト教信仰に置き換えられた事例と言える²⁹。

このように、植民地時代のメキシコでは新たなカトリック聖地が次々と誕生したが、他の例を見ても先スペイン期からの聖地の連続性は顕著である。市内に365の教会があるとも言われるプエブラ州 Cholula のロス・レメディオスの聖母礼拝堂 (Santuario de Nuestra Señora de los Remedios) は、丘の上に位置しているように見えるが、実は先スペイン期の巨大ピラミッド神殿の上に建てられたものである (写真14)。トラスカラ州のオコトラン教会 (Basílica de Ocotlán) は、征服直後に破壊された神殿の跡地に神殿建築の石を再利用して1530年代後半に建造されたもので、テペヤクの場合と同様、植民地時代初期に先住民の前に聖母が出現したとされる16世紀以来の巡礼地である (写真15)³⁰。小さな丘のように見えるかつてのピラミッド (エル・セ



写真14: かつてのピラミッド神殿の頂上に建つロス・レメディオスの聖母礼拝堂
〔2012年、プエブラ州サン・ペドロ・ Cholula 行政区で筆者撮影〕



写真15: メキシコ・バロック様式のオコトラン教会の内部
〔2015年、トラスカラ州トラスカラ行政区オコトランで筆者撮影〕



写真16: エル・プエブリートの聖母像
〔2016年、ケレタロ州ケレタロ行政区エル・プエブリートで筆者撮影〕

リート遺跡)のすぐ脇に位置するケレタロ州エル・プエブリートでは、17世紀に聖母信仰が宣教師によって導入され、18世紀にフランシスコ会のミチョアカン管区の守護聖母として信仰を集めた「エル・プエブリエートの聖母」を祀る礼拝堂 (Santuario de la Virgen de El Pueblito) が今も信仰を集めている (写真16)³¹。

以上のように、先スペイン期の聖地は、ある時には布教される側である先住民自身によって、またある時には布教者であるスペイン人側の働きかけによって、キリスト教の聖地へと置き換えられた。それらの中には現在に至るまで巡礼地として機能している場所がいくつも存在するが、スペインのコンポステラに向かう巡礼道のようなものはほとんど整備されていない。先住民共同体などの集団が徒歩で巡礼をする姿も多く見られるが、インフラ整備の不足に加えて治安の問題もあることから、必ずしも徒歩にこだわって巡礼がなされているわけではないのが現状である。

おわりに

本稿では、メキシコの植民地化とカトリック布教の経緯を概観した上で、聖ヤコブ信仰がどのように浸透したのか、カトリックの聖地がどのようにして成立してきたのかの二点について考察した。征服後にスペイン人がもたらした信仰には、ある程度当時のスペイン固有の状況が反映された。しかし、それと同時に、先住民側の受容にも一定の取捨選択があり、スペインの事情に沿ったカトリック信仰が現地の事情に合わせてさらに形を変えながらメキシコに定着していったことが見てとられる。

最後に、メキシコの今後について簡潔に展望しておきたい。現在、日本は観光立国を掲げ、訪日外国人4000万人を目標にしているが、メキシコは既に観光大国である。日本政府観光局による2018年の外国人観光客数ランキングによれば、日本は世界11位 (3119.2万人) であるが、メキシコは世界7位 (4144.7万人) で、南北アメリカ諸国の中では米国に次いで多くの外国人観光客を受け入れている³²。観光客を惹きつける要因として重要なユネスコ世界遺産の登録件数を見ても、メキシコの観光大国ぶりがわかる。1987年のメキシコ市歴史地区やテオティワカンなど4件に始まり、日本よりもはるかに多い35件の世界遺産 (文化遺産27件、自然遺産6件、複合遺産2件) がこれまでに登録されている³³。

近年、メキシコでは外国人のみならず国内観光客を対象とした観光の振興も盛んである。2010年の独立200周年記念の歴史的・文化的史跡への投資や、2001年から2019年までメキシコ観光省 (SECTUR) が推進してきた「魅惑の街 (pueblos mágicos)」プログラムはそうした例と言える。後者のプログラムでは、18年間で121の町村が認定され政府の補助金が交付された³⁴。また、メキシコ市 (2016年1月までの名称はメキシコ連邦区) でも、これの市内版とも言える観光振興策が市の観光局によってなされ、2011年から「魅惑の地区 (barrios mágicos)」として21か所が認定された。

2018年5月、メキシコ観光省は「メキシコのサンティアゴの道」という、文化的宗教的な観光プログラムを発表した³⁵。既にユネスコ世界遺産に登録されているサン・ミゲル・デ・アジェンデ、ケレタロ、メキシコ市 (サンティアゴ・トラテロルコ) を導線として聖ヤコブに関連するイベントや観光の振興を促し、スペインのコンポステラ巡礼に結びつけるという意図だという。確かに、コンポステラの巡礼者数の公式な統計によると、メキシコ人巡礼者数は、米国、ブラジル、カナダに次いで南北アメリカで4番目に多く、2018年には3578人がサンティアゴ巡礼を行っている (なお、同じ年の日本人巡礼者数はその半分以下の1477人である)³⁶。現代的なツーリズムの加速が、本稿で見た聖ヤコブ信仰やカトリックの聖地を何らかの形で変えていくことは間違いないだろう。歴史的な事象を研究し続ける一方で、そうした動きにも目を向けていきたい。

注釈

¹ メソアメリカは、正確にはメキシコ (北部を除く) から中米諸国 (グアテマラ、ベリーズ、エルサルバドルの全域とホンジュラス、ニカラグア、コスタリカの一部) に広がる文化領域で、エジプト、メソポタミア、インド、中国、アンデスと並ぶ世界的な古代文明圏の一つである。

² 便宜上、本稿ではスペインと呼ぶが、正確には海外領はカスティーリヤ王室に帰属した。

³ Robert Ricard, *La conquista espiritual de México. Ensayo sobre el apostolado y los métodos misioneros de las órdenes mendicantes en la Nueva España de 1523-1524 a 1572*. Trad. de Ángel María Garibay K., México, FCE, 1986 [1947].

- 4 集住化政策および植民地時代の先住民村落については、以下の研究を参照。Peter Gerhard, *A Guide to the Historical Geography of New Spain*. Norman, University of Oklahoma Press, 1993 (Revised Edition); Dorothy Tanck de Estrada, *Atlas ilustrado de los pueblos de indios, Nueva España, 1800*. México, El Colegio de México-El Colegio Mexiquense, 2005; Ernesto de la Torre Villar, *Las congregaciones de los pueblos de indios. Fase terminal: aprobaciones y rectificaciones*. México, Universidad Nacional Autónoma de México, 1995; María Teresa Jarquín O., *Congregaciones de pueblos en el Estado de México*. Zacantepec, El Colegio Mexiquense, 1994; José Luis Melgarejo Vivanco, *Raíces del municipio mexicano*. Xalapa, Universidad Veracruzana, 1988.
- 5 メキシコ市内に残る地名の例をいくつか挙げると、クアウシマルパン（ナワトル語で「薪にする木々の地」）では聖ペテロが守護聖人となり、村の名称はサン・ペドロ・クアヒマルパ（現クアヒマルパ・デ・モロス区中心部）、アショチコ（「水の花の地」）は聖トマスの名を伴ってサント・トマス・アフスコ（現トラルパン区内）、シカルコ（「瓢箪の容器の地」）は大天使ミカエルの名を伴ってサン・ミゲル・シカルコ（現トラルパン区内）となった。
- 6 他に、死者の日（11月1～2日）や聖母グアダルupesの日（12月12日）に大きな祭礼が開かれることも多い。
- 7 その長はマヨルドモと呼ばれる。なお、都市部や都市部に近いところでは、「祭礼委員会」のような現代的な呼称の場合もある。
- 8 関哲行『前近代スペインのサンティアゴ巡礼—比較巡礼史序説』流通経済大学出版社、2019年、58～67、79～82頁。
- 9 関 前掲書 83頁。
- 10 聖母マリアと聖ヤコブ両方の出現に同時に触れている史料の例としては、Diego Durán, *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme*. Ed. de Rosa Camelo y José Rubén Romero Galván, México, CONACULTA, 1995 (2 tomos), t. I, pp. 645-646. また、ケレタロ創設にかかわるニコラス・デ・サン・ルイス・モンタニェスの報告書では、これら二者に加えて聖フランシスコも出現したと記載されている。Valentín F. Frías, *La conquista de Querétaro. Obra ilustrada con grabados que contiene lo que hasta hoy se ha escrito sobre tan importante acontecimiento, así como Documentos inéditos de bastante interés para la historia de Querétaro*. Querétaro, Imprenta de la Escuela de Artes de Señor San José, 1906, pp. 65-68.
- 11 近世におけるスペインの守護聖人の座を巡る争いの詳細については、次の研究書がある。Erin Kathleen Rowe, *Saint and Nation: Santiago, Teresa de Avila, and Plural Identities in Early Modern Spain*. University Park, The Pennsylvania State University Press, 2011.
- 12 Luis Weckmann, *La herencia medieval de México*. México, FCE, 1994 (2ª ed.), pp. 163-183; Louis Cardaillac, *Santiago apóstol. El santo de los dos mundos*. Zapopan, El Colegio de Jalisco, 2002, pp. 123-158; Araceli Campos y Louis Cardaillac, *Indios y cristianos. Cómo en México el Santiago español se hizo indio*. México, El Colegio de Jalisco-UNAM-Editorial Itaca, 2007.
- 13 ロベス・デ・ゴマラは、コルテスに仕えた人物であるが、新大陸への渡航経験はない。1552年にサラゴサで出版された『インディアス全史』（その第2巻がメキシコ征服史を扱っている）を書いた。Francisco López de Gómara, *Historia de la conquista de México*. Ed. de Jorge Gurriá Lacroix, Caracas, Biblioteca Ayacucho, 1979.
- 14 このイメージの原型となったのが、スペイン北東部のクラビホの戦い（844または834年）において聖ヤコブが顕現し、イスラーム教徒を殲滅させてアストゥリアス王ラミーロ1世軍を救ったという伝承である。
- 15 キューバのサンティアゴ・デ・クーバ、南米チリのサンティアゴ・デ・チレなどは「最前線」でサンティアゴの地名が付けられた場所と言える。メキシコでは、テノチティトランに隣接した都市トラテロルコが征服とともにサンティアゴ・トラテロルコと命名され、フランシスコ修道会の最初の布教拠点の一つとなった。
- 16 スペイン人の記録文書（クロニカ）の中で聖ヤコブ出現譚が定着していく過程については、次の拙稿を参照されたい。井上幸孝「アステカ征服における聖ヤコブ—クロニカの記述を中心に—」『専修人文論集』第105号、2019年、135～159頁。
- 17 Frías, *op. cit.*, 1906, p.68.
- 18 David Charles Wright Carr (ed.), *Origen de la santísima cruz de milagros de la ciudad de Querétaro*. Madrid, Iberoamericana-Vervuert, 2017, pp. 27-30. 現在もケレタロ市、ケレタロ州両方の紋章に太陽と聖ヤコブが含まれている。
- 19 Campos y Cardaillac, *op. cit.*, 2007, pp. 179-196.
- 20 Juan Carmona Muela, *Iconografía de los santos*. Madrid, Akal, 2003, p.413. 大原志麻・田辺加恵・井上幸孝「サンティアゴ図像の変遷—間テクスト性と図像—」『翻訳の文化/文化の翻訳』第14号、静岡大学人文社会科学部翻訳文化研究会、27～72頁。なお、モーロ人殺しの聖ヤコブ像の形成については、次の論文が具体的な経緯を扱っている。田辺加恵「『マタモロス聖ヤコブ』像の形成とその戦略的利用」『スペイン史研究』第30号、2016年、18～30頁。

- ²¹ Bernardino de Sahagún, *Psalmody christiana y Sermonario de los santos del año, en lengua mexicana*. Ed. de José Luis Suárez Roca, León, Instituto Leonés de Cultura, 1999, pp. 220-222.
- ²² 宗教劇については、オルカシートスによる古典的研究のほか、セルとバークハートによる大部な史料が公刊されている。Fernando Horcasitas, *Teatro náhuatl*. México, UNAM, 2004 (2a ed.), 2 tomos; Barry D. Sell and Louise M. Burkhart (eds.), *Nahuatl Theater*, Norman, University of Oklahoma, 2004-2009, 4 vols.
- ²³ 「モーロ人とキリスト教徒の踊り」については、以下を参照。黒田悦子『フィエスター中米の祭りと芸能』平凡社、1988年; 小林致広「メヒコ征服の踊り(1)~(6)」『神戸外大論叢』第39巻第5号~第41巻第4号、1988~1990年; Arturo Warman, *La danza de moros y cristianos, México*, Sep/Setentas, 1972; José Fernando Domene Verdú, *Las fiestas de moros y cristianos*. Sant Vicent del Raspeig, Universitat d'Alacant, 2015.
- ²⁴ サアゲン『神々とのたたかい I』篠原愛人・染田秀藤訳、岩波書店、1992年、162~163頁。なお、()内は本稿での引用に際しての省略箇所を示す。
- ²⁵ La Jornada 紙 (電子版) <https://www.jornada.com.mx/ultimas/sociedad/2018/12/13/recibe-el-templo-mariano-10-6-millones-de-feligreses-1383.html> (2019年1月5日参照)
- ²⁶ メキシコ国内の巡礼地については、以下を参照。Haydée Quiroz Malca, *Fiestas, peregrinaciones y santuarios en México. Los viajes para el pago de las mandas*. México, CONACULTA, 2000; *La ruta de los santuarios en México*. México, CVS, 1994.
- ²⁷ チャルマについては、以下を参照。María J. Rodríguez-Shadow y Robert D. Shadow, *El pueblo del Señor. Las fiestas y peregrinaciones de Chalma. Toluca*, Universidad Autónoma del Estado de México, 2002 (2ª ed.); Joaquín Sardo, *Relación histórica y moral de la portentosa imagen de N. Sr. Jesucristo crucificado aparecido en una de las cuevas de S. Miguel de Chalma*. Edición facsimilar de la de 1810, México, Biblioteca Enciclopédica del Estado de México, 1979.
- ²⁸ Secretaría de Turismo, “Agendas de competitividad de los destinos turísticos de México: Chalma, Estado de México” <http://www.sectur.gob.mx/wp-content/uploads/2015/02/PDF-Chalma.pdf> (2019年6月16日参照)
- ²⁹ Rodríguez-Shadow y Shadow, *op. cit.*, 2002, pp. 35-45.
- ³⁰ Quiroz Malca, *op. cit.*, 2000, p.141.
- ³¹ エル・プエブリートについては、以下を参照。Vicente Acosta y Cesáreo Munguía, *La milagrosa imagen de Ntra. Señora del Pueblito, tomo I: Compendio histórico de su culto*. México, Jus, 1962 (2ª ed.); Aurora Castillo Escalona y Genoveva Orvañanos Busto, *La Virgen del Pueblito: historia y culto*. Querétaro, Universidad Autónoma de Querétaro, 2002.
- ³² 日本政府観光局「世界各国・地域への外国人訪問者数ランキング」https://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/visitors_ranking.pdf (2020年1月6日参照)
- ³³ 2018年、「テワカン=クイカトラン溪谷:メソアメリカの起源となる環境」が新たに複合遺産として加えられた。なお、日本の世界遺産数は2019年登録の「百舌鳥・古市古墳群」を含め23件である。
- ³⁴ 小林貴徳「メキシコにおける観光開発政策の転換と地域活性ー『プエブロス・マヒコス (魅惑的な町)』プログラムの試みー」天理大学アメリカス学会編『アメリカスのまなざしー再魔術化される観光ー』、天理大学出版部、2014年、98~117頁。
- ³⁵ La Jornada 紙 (電子版) <https://www.jornada.com.mx/ultimas/economia/2018/05/20/presenta-sectur-201ccamino-mexicano-de-santiago201d-8879.html> (2019年1月6日参照)
- ³⁶ Oficina del Peregrino, Informe estadístico Año 2018. <http://oficinadelperegrino.com/wp-content/uploads/2016/02/peregrinaciones2018.pdf> (2020年1月6日参照)

謝 辞

本稿は、JSPS 科研費 JP17K02037 (基盤研究(C)「スペインとメキシコにおける聖ヤコブ信仰の継続と変容の統合的分析」、研究代表者 井上幸孝) の助成を受けた研究成果の一部である。